

お読みいただく前に。

本稿の執筆及び公開にあたっては著作権法32条1項に則り、作品上で歌曲のタイトルを引用をさせていただきました。(タイトルは『』でくくつてあります)。問題点などありますればお知らせください。いますよう、よろしくお願いたします。

(本稿最後に引用曲の歌唱者・作詞者・作曲者、氏名を明示いたしております) 主な登場人物

溪川羽月(ガロピーヌ・ボーカル)

連城美咲(ガロピーヌ/ラ・フェイ・リードギター)

松川愛佳(ガロピーヌ/ラ・フェイ・ベーギター)

野々村鈴奈(ガロピーヌ/ラ・フェイ・ドラム)

水原光流(ラ・フェイ・ボーカル)

関本慎太(ライブハウス経営者、羽月の里親)

順花(慎太の妻)

牧原香帆(ラ・フェイのマネージャー)

兼プロデューサー)

御園生福丸(羽月の高校時代の同級生)

新野真菜美(朔野高校軽音学部部长)

江藤紗彩(朔野高校軽音学部部长)

岡崎(ガロピーヌ、マネージャー)

泉谷しげる(シンガーソングライター)

○児童養護施設〈愛翔園〉外景

入口門柱にその施設名。

○前同・応接室

机を前にしてソファに座っている

関本慎太(32) 順花(31) 夫

妻。

中年の男性職員が、溪川羽月(7)

を連れて入ってくる。夫妻と向い

合せに座る二人。羽月、一瞬二人

を見るが、すぐにうつむく。

職員「名前は溪川羽月。七歳。たには一般的なな谷やなく、溪谷の溪。かわは三本川。鳥の羽根にお月様の月。小学一年生。父親とは四歳のときに死別。以降母親の手で育てられますが——いや、育ててへんな。前に別の職員が話したとおりの育児放棄、いうやつですわ」

順花「はい」

職員「(羽月を見て) 里親になってくれはる関本さんや・あいさつしよか」

羽月、うつむいたまま無言。

職員「ほとんど誰とも話し、しませんのや」

順花、羽月が小さなポーチを肩がけていることに気づく。

順花「かわいらしいポーチやねえ」

ビクっとなる羽月。答えない。

順花「なにが入ってるのん？」

うつむいたままの羽月。

職員「CDですわ」

順花「CD？」

職員「ええ。アマチュアバンドやってた父親が持ってたもんらしいてね。独りで家にいる間ずっと聴いてたそうです。ここにきてからも肌身離さず持つてますわ」

立ち上がる順花。羽月の前で腰を

落とす。

順花「なんのCD？ 見せてくれへん？」

ぎゅっとポーチを握る羽月。

順花「わたしもな、音楽好きでよう聴く

ねんで。羽月ちゃんはどんなの聴いてる

んやろ。興味あるなあ」

ちらっと順花を見る羽月。順花微笑ん

で羽月を見ている。ゆっくりポーチを肩から外し、開ける。CDをそっと差し出す。受け取る順花。

順花「うわあ！ 泉谷しげるの『セルフカバーズ』やて！ すごい！」

慎太「ええっ！ ほんまか！？」

慎太も立ち上がり、羽月の前で腰を落とす。

慎太「ルーザーといっしょのやつや。ギターがRCのチャボにルースターズの下山淳。

ドラムが村上ポンタでベースが吉田健。泉谷が集めたごっついメンバーや。名盤やで」

驚いている二人を不思議そうに見る羽月。

順花「すごい聴いてるんやなあ。なあ、羽月ちゃん、うちにもこんなCDいっぱいある。この人のCDもぎょうさんあるわ」

慎太「おっちゃんとかな、こんな歌うたう人や聴きにくる人が、毎日ぎょうさん集まってくるねんで」

順花と慎太をかわるがわる見る羽月。

順花「なあ、一回うちに来てみいひん？」

順花をじっと見ている羽月。うつむく。

順花、羽月の手を優しく握る。

泉谷しげる『春夏秋冬』を口ずさむ順花。

順花の歌声に顔を上げる羽月。

順花「な——これからはいっしょに歌おう」

羽月の手を強く握りしめる順花。羽月、

順花をじっと見ているが、やがてその手を握り返す。

(F・O)

○メインタイトル

へラ、ガロピーヌ！

○朔野高校・校庭

卒業式の後。胸に花飾りをつけた卒業生たちが、そこで談笑している。

走っていく卒業生の松川愛佳。ギターケースを背にして全力で。

○前同・体育館入口

〈卒業証書授与式〉の立て看板を片付けている教師二人。その横を、体育館へと飛び込んでいく愛佳。

○前同・体育館地下への階段

駆け下りていく愛佳。

○前同・軽音楽部練習場の前の廊下

アコースティックギターを前掛けにしている溪川羽月（18）。エレキギター前掛けの連城美咲（18）。

ドラムスティックをもった野々村鈴奈（18）。待っている三人のところに愛佳、飛び込むように。膝に手をつき肩で息。

羽月「おっそい」

愛佳「ご、ごめん……ギター同好会の後輩らが離してくれへんくて……」

鈴奈「頑張ったよね。二足のソウリ」

美咲「ワラジ」

鈴奈「あはは、そうや。ワラジ」

羽月「ほら、皆さんお待ちかねや。いくで」

〈ガロピーヌ・校内ラストライブ！〉  
の書きポスターが貼ってあるドアを押し開ける羽月。練習場に入っていく四人。

○前同・軽音楽部練習場

二十畳ほどの練習場に集まっている  
八十人ほどの生徒たち。四人が入っ  
て来て、どよめきがおきる。拍手、  
指笛。

鈴奈「けっこう集まったなあ」

愛佳「そりゃあスクールロック金賞はダメや  
ないってば」

一段高くなった演台に上がる四人。

ドラムセットの前に座る鈴奈。中央に  
立つ羽月。向かって左にベースの愛佳。  
右にギターの美咲。チューニングをす  
る四人。

観客の生徒たちを見て、スタンドマイ  
クを握る羽月。

羽月「今日は集まってくれてありがとう。校

内ラストライブ、楽しんでってください。えー、  
レコード会社も決まりました。とりあえず東  
京行って天下獲ってくるわ」

沸き起こる歓声、拍手。見交わす四人。  
頷く。

羽月「行くよ！ 『デトロイトポーカー』！」

美咲のイントロに続き泉谷しげるの

『デトロイトポーカー』を歌いだす羽月。  
熱狂の観客。

○大阪・鶴橋のコリアンタウン

様々な店が並んでいる。

○ライブハウスへコッタパルル〜外景（夜）

壁に大きく花束のオブジェがあるライ  
ブハウス。

○前同・店内（夜）

キャパシティー二五〇人ほどのライブ

ハウス。ガロピーヌのライブ終わり。

客席でにぎやかに打ち上げをしている

四人と慎太らスタツフたち。順花がそこにやってくる。

順花「羽月にビール飲ませたりしてへんやろね」

慎太「飲ませてへんよ」

羽月「飲んでませーん」

順花「あんた、今度酒飲んでゲェ吐いて便器と合体したら承知せえへんからね」

羽月「そやから飲んでへんって言うてるやん！」

愛佳「順花さん、羽月マジで飲んでない」

鈴奈「うん。やっぱり大事なときやし、わたしら」

羽月「はい、わたしの勝ち」

順花「ほんまに——三人とも、ちゃんと進学するんやね」

愛佳「はい。わたしと美咲は同じ芸能の専門学校に行きます」

順花「美咲ちゃんはギター勉強するん？」

美咲「はい。基礎から教えてもらいたくって」

順花「えらい。愛佳ちゃんは？」

愛佳「照明とか音響とかのスタツフのコースがあるから、そっちの勉強します」

順花「興味あるんや」

愛佳「ちょっとだけやけど」

順花「鈴奈ちゃんは四大やったね」

鈴奈「はい。進学するのがお父さんの条件やっただんで。女子大生やっけます」

順花「うん、頑張つてな。ええな三人とも、浮わつた世界に流されたらあかんよ。学生の本分は勉強や。ご両親もそう思っってはるんやで」

頷く三人。

羽月「あゝあ、どこのガツコの先生のありが

たいお話やろうねえ」

キツと羽月を見る順花。

羽月「聞き飽きました。社会保険がどうか、年金がどうか、将来の展望がどうか、う話は」

順花「……アホが。あんただけ負けて帰ってこい」

羽月「サイン残しといたろか、テーブルに。いつかとんでもない価値でるから」

慎太「はい、もうそこらへん」

割って入る慎太。アコースティックギターの手に取り、椅子に座ってギターを爪弾きだす。

慎太「そしたら旅立つ君たちにぼくからのプレゼントや——」

岡林信康の『友よ』唄い始める慎太。

羽月「なにそれ？」

慎太「知らんの？ 岡林信康の『友よ』や。

羽月の好きな泉谷の師匠みたいな人の歌やがな——」

慎太の歌に聴き入る四人。

順花「——戦いの炎燃やして輝く明日が来るんやったら、誰でも明日はスーパースターや」

慎太の歌をじっと聴いている四人。

○東京タワー・全景（夜）

テロップ（以下T）【二年後】

○前同・トップデッキ内（夜）

夜景を見ている羽月。エレベーターの扉が開き、美咲、愛佳、鈴奈が出てくる。

愛佳「なにい急に」

羽月の横に立つ三人。

羽月「みんなとな、一回ここから東京の夜景

見たかってん」

美咲「きれいやなあ」

鈴奈「うん、ほんまに」

羽月「——あの、あんな、鈴奈。あんたこれからどうするん?」

鈴奈「これからって?」

羽月「いや、だから。あんた四月から三回生やる。就職活動とかどうするんかって」

鈴奈「シューカツかあ。そんなんせんかてなんとかなるやろ」

羽月「なんとかって」

美咲「うん。なんとかなる」

愛佳「そうそう、なるなる」

羽月「あんたらなあ、他人事や思っつて軽々しく言いなや。だいたいあんたらかて、就職しよう思っつたら行くところは——」

鈴奈「おい羽月」

羽月「え?」

鈴奈「こういうことはまず自分の気持ちさ  
らけ出してから相手に訊くことなんとち  
がう? わたし羽月がどう思っつてるか訊  
きたいわ」

美咲「下正論」

愛佳「やねえ」

羽月「わたし——わたしはガロピー又続け  
たい。ツアーも対バンしてなんとかキャ  
パ八割くらいでしかないけど、アルバム  
二枚も全然売れへんかったけど、みんな  
といっしょにバンド続けたい」

美咲「対バンしてキャパ八割にまでできる  
ようになった」

鈴奈「そうや。ファースト、オリコン一〇  
四位、セカンド九十二位。たいしたもの  
やと思っつてるよ、わたしは」

愛佳「羽月は意外とネガティブちゃんなど



ころがあるからなあ」

笑う三人。

羽月「あんたら——」

鈴奈「みんなで大坂から出てきたんや。そりゃ最初は羽月に引っ張られてたところもあつたけど、今は違うよ。わたしかてガロピーヌで成功したい」

愛佳「レコード会社や事務所も契約切るとか言ってきてへんのやからさ、あと三年は頑張ってみようよ」

羽月「あと三年」

愛佳「うん。三年後には単独でライブハウス満員にできてるよ。もっと大きな会場で演れて、アルバムもチャート上位に来てるよ。なんかその姿が想像できるんよ、わたし」

美咲「そやな、うん。わたしもそうや」

鈴奈「ええ感じできてると思うで、わたしら。ゆっくりやけどさ」

微笑んで羽月を見る三人。

羽月「あんたら——」

鈴奈「けど、ほんまにきれいやなあ、東京の夜景」

眼下の夜景を見る四人。

羽月「もつともつと届けたいわ、わたしら  
の音」

美咲「うーん。そのためにはブライアン・

エプスタインが要るなあ」

鈴奈「え？」

愛佳「だれ、その外人？」

美咲「もう、それくらい知つといてえや。

ビートルズのマネージャーやった人。彼のマネジメントがなかったら、ビートルズはあそこまで成功してへん」

鈴奈「確かにそんな人は要るかもな」

美咲「わたしらといっしょに、わたしらの

音楽作ってくれる人、いるって思わへん？」

愛佳「うん、要る。岡崎ではアカン」

羽月「話にならんわ。親会社の常務の息子

かなんか知らんけど、ライブも観んとずつ

とラインしてるようなアホ」

●インサート

ガロピーヌのライブ中。その音が聞

こえてくる楽屋の中。パイプ椅子に座り

ニヤニヤしながらスマートフォンを弄

っているマネージャーの岡崎。

鈴奈「キャバ嬢に必死こいてラインしまくつ

てんのやろ、あれ」

羽月「尻の毛えまで全抜かれされたらええ

ねん、あんなアホは」

鈴奈「汚あ羽月。想像してしもたやん、岡

崎の尻」

爆笑する四人。

羽月「よし、マネージャー替えてくれるよ

うに掛け合ってみるわ事務所に」

美咲「一人で大丈夫？」

羽月「任しといて」

鈴奈「なあ、アルバムの準備に入らへん？」

愛佳「ええ、セカンド出してからまだ半

年も経ってへんのに？」

鈴奈「そやからここで勝負かけるんよ。メ

チャメチャ売れんでもええねん。けど振

り返ってな、あのサードアルバムがあつ

たから今のガロピーヌがある、そんなこ

と言うてもらえるようなやつ。ほら、言

うやん、エポックなんたらって」

美咲「エポックメイキング」

鈴奈「そう、それ。それになるアルバム作

らへん？」

羽月「——ええやん、それ」

鈴奈「な、ええやろ」

羽月「書き溜めてるやつけっこうあるんよ。

もう一回本意気で書き直してみるわ。美

咲、曲頼んだで。全部詞先になるけど」

美咲「いつものことやん」

羽月「うん。いつもどおりみんなでアレン

ジしようや。そんで歌詞でアカンところ

あつたらガンガン言うてえや」

愛佳「誤字の指摘からやな」

羽月「うるさいわ」

笑う四人。

○音楽スタジオ・メインスタジオ【二週間後】

オリジナル曲を演奏しているガロピー

ヌの四人。

○前同・コントロールルーム

ガロピーヌの演奏を聴いている牧原香

帆(39)。

○前同・ロビー

ソファーに座っている四人のところへ

やってくる香帆。立ち上がる四人。

羽月「どうでしたか」

香帆「そうね、一週間後、またここに来てく

れるっ。」

羽月「一週間後、ですか」

香帆「うん、そう」

美咲「あの、それってどういう——」

香帆「返事はそのとき。じゃ、今日はこれで」

ロビーを出ていく香帆。

美咲「あの人、アルテミスプロモーションか

ら移ってきたらしいわ」

愛佳「はあ？ あそこモデルや女優がメイン

の事務所やん。そんな人に任せて大丈夫な

ん?」

美咲「さあ。でも部長はかなりのキレモノやっ  
て言うてたで、さっき」

廊下を歩いて行く香帆。遠ざかるその  
背中をじっと見つめている羽月。

○音楽スタジオ・メインスタジオ【一週間後】

集まっているガロピーヌの四人。

(鈴奈はドラムセットを前に座り、美咲、

愛佳はギターを前掛け。その中央に羽月。)

入ってくる香帆。少し遅れて若い女。

彼女を怪訝そうに見る四人。

香帆「おまたせ」

女を少し後ろにして、四人の前に立つ香帆。

羽月「あの、この人は」

香帆「紹介するわ。水原光流。年はあなたたち

と同じ。モデルとしてデビューした。彼女と

いっしょにわたしは移ってきたの」

無言の光流。その眼光の鋭さに威圧され

ている四人。

香帆「溪川さん、今からここで彼女の歌を聴

いていて」

羽月「え」

香帆「三人は演奏の準備してくれる?」

羽月「どういうことですか」

香帆「説明は歌が終わってから。曲はファー

ストアルバムであなたたちがカバーしてた

泉谷しげるの『火の鳥』。彼女歌詞もメロディー

もちゃんと入ってるから心配しなくていい」

愛佳「——あの、演れません」

香帆「は?」

愛佳「あなたがなにを考えているのか知らない

けど、演れません。わたしたちはこの四人で

ずっと演ってきました。羽月のボーカルじゃ

ないと、演奏なんてできません」

頷く美咲。鈴奈も。

香帆「ハァ——クソアマチュアが」

息を飲む四人。

香帆「あなたがどうしてブレイクできないのかよく分かったわ。はい、分かりました。

わたしの役目はこれで終わり。帰ろうか光流。

わたしの見込み違いだったみたい」

スタジオを出て行こうとする香帆と光流。

羽月「待って！」

立ち止まる二人。羽月、三人に向かって。

羽月「演って、いいからさ」

愛佳「羽月」

微笑んでうなづく羽月。

× × ×

チューニングをする美咲と愛佳。鈴奈を

振り返りうなづく二人。

鈴奈「うん——いくよ、ワン、ツー、ワンツ

ースリーフォッ！」

鈴奈のカウントに続き、美咲のギターソ

ロのイントロ。うつむき加減でじつとそ

の音を聴いていた光流だったが。

光流「止めてっ！」

驚いて弾くのをやめる美咲。

光流「一音上げて」

光流を見る美咲。

光流「聞こえなかった？ 一音上げてって言うてるの」

スタジオの壁に寄りかかり、その様を

じつと見ている羽月。

一音上がった再びのイントロ。光流が

うたいだす。

透明感と破壊力が合わさったような独

特の歌声。広い音域と圧倒的な音量に

驚く三人。

ぐんぐん伸びていくその歌声に、三人

の演奏も勢いを増していく。その様はまさに相乗効果。歌声が演奏を引っ張り、演奏が歌声を高めていく。

頷きながらその様子を見ている香帆。

言葉を失っている羽月。

演奏が終わる。拍手をする香帆。上気

した頬の美咲、愛佳、鈴奈。笑みさえ

浮かべている三人だったが蒼白な顔の

羽月を見て我に返る。

愛佳「――羽月」

香帆「どうだった三人、光流と演ってみて」

無言の三人。

香帆「ふふ――光流はどうだった？」

光流「バンドっていいですね。最高でした」

初めて光流が笑顔を見せる。

香帆「言ったでしょ、わたしの耳に狂いはな

いって。この三人といっしょに組みたい？」

頷く光流。

香帆「うん、よし」

歩を進め、三人の前に立つ香帆。

香帆「すごい歌声でしょ。モンスターボイスっ

てわたしは呼んでるの」

鈴奈「モンスターボイス……」

香帆「ええ。モデルの子や事務所のスタッフ

たちとカラオケいったとき、初めて歌声聞

いてね、この子絶対歌い手にさせなきゃい

けないって思ったの。バンドのプロデュース、

前からやってみたかったしね。だからいっしょ

に移ってきたわけ。マネージャーの話、受け

させてもらうわ。スケジュール管理なんかに

ついてはもう一人しっかりした人つけてもら

うよう言っている。あくまでわたしはあなた

たちのプロデュースに専念します。ただし、

条件が二つある」

三人を見渡す香帆。

香帆「ひとつ、わたしのプロデュースに素直に従う事。ふたつ、光流を新しいボーカルにすること」

息を飲む三人。

愛佳「——ちよつ、新しいボーカルって」

香帆「溪川さんには抜けてもらうわ。バンド名も変更する」

ちらつと羽月を見る香帆。凝った顔の

羽月。

鈴奈「そんな……」

香帆「あなたたちのことはデビュー当時から知ってた。粗削りだけディキのいい女の子バンドが出てきたなあって思ってたのよ。」

ボーカル以外は」

美咲「——断ったら」

香帆「光流の声聴いて、簡単に断れる？」

美咲を見る香帆。うつむく美咲。

香帆「一度だけプレゼン。光流がボーカルになったら、あなたたちの売り出しにわたしは全力を注ぐ。プランはもう練ってる。そのプランを遂行し、成功を掴むだけのポテンシャルをあなたたちは持つてる。それをわたしならすべて引き出せる。だからわたしに安心して任せてほしい。どう？」

言葉を失っている三人。

香帆「光流はなにかある？」

光流、三人に向き直って。

光流「みんなと、バンドやりたい。わたしはこれからみんなの音で歌いたい」

香帆「と、ボーカル候補の熱いラブコールがあつたけど、さてどうしますか皆さん」

愛佳「——すぐに返事をしなくちゃいけな

いんですか」

香帆「二十分だけあげる」

愛佳「そんな」

香帆「聞いたことない？ チャンスの神様には前髪しかないって。隣の本社の二階小会議室で待ってます。一人でも現れなかったときは、この話はなかったことと諦めます。他のバンドをさがすわ。行こう、光流」

スタジオを出ていきかける香帆と光流。

香帆、足を止め振り返って。

香帆「溪川さん」

香帆を見る羽月。笑みを浮かべ羽月を見る香帆。

香帆「残念ながらあなたにはなにもない。あなたにプロとして生き残っていける可能性は微塵もない。あなたの歌声はスクールロックフェス優勝レベル。そこで終わり。伸びしろなんかないわ。事務所もあなただけ解約の方針よ。一日も早く撤退しなさい。自分のため、そして三人のためにもね」

スタジオを出ていく香帆と光流。

残された四人。重い沈黙。

羽月「ごめんな」

羽月、俯いて。

愛佳「羽月」

羽月「今の演奏聴いて分かった。わたし、みんなにあんな音出させてあげられへんかった。みんなにあんなええ顔で音ださせてあげられへんかった。今までなにやってきたんやろ。ほんまにごめんな」

鈴奈「羽月」

羽月「答え出てるやろ。早よ行って」

美咲「羽月」

羽月「早よ行ってえや！ すぐに断らへんかったんがあんたらの答えや！ これ以上惨めな思いさせんといてえや！」

顔を上げる羽月。三人を見やって。笑って。



羽月「ごめん——大きな声出して。最後まで  
ほんまにアホやな、わたし。すごいところ  
まで行けると思う。あの光流って子といっしょ  
やったら。さっきみんなが出した音やったら、  
絶対すごいところまで行けるよ——ほら、早  
うせんと前髪しかないブサイクな神様、逃げ  
てっってしまうよ」

微笑んでいる羽月をじっと見つめている三  
人。

○音楽スタジオ・廊下

走っていく美咲、愛佳、鈴奈。ギターケー  
スを背に、スティックを手に、全力で、泣  
きながら走っていく。

○音楽スタジオ・メインスタジオ

独り、立ち尽くす羽月。

(F・O)

○ヘコッタパルル〈店内【二週間後】

テーブルの拭き掃除をしている順花。  
トランクケースを曳いて羽月が入って  
くる。順花の数歩前で止まる羽月。

羽月「ただいま」

順花「——おかえり」

羽月「順ちゃんの言うたとおりになったわ。  
わたしだけ負けて帰ってきた。ははは」

順花「——」

羽月「笑てえや。わたしな、なんもないって  
言われてん。なんにもないんやてわたし。  
笑てまうやろ。なんでも持ってるって思っ  
ててんで。けどなんもなかってん。ははは、  
アホやで」

羽月の目から涙がこぼれる。

羽月「はははは。アホや。世界一のアホやん」

笑いながら泣く羽月。順花、優しく羽月を抱きしめる。

羽月「なんもなかってん。わたしな、なんもなかってんよ……」

抱きしめる順花に頭を優しく撫でられながら、泣き続ける羽月。

○へコッタパルルへ入口(夜)【二週間後】

へアマチュアナイト 飛び入り大歓

迎！への黒板掲示。

○前同・店内(夜)

【ホール】

ステージでアコースティックギターをかき鳴らし、フォークソングを歌っている初老の男性二人組。客はそこそこ入っており、みなテーブル席に座ってヤジなど飛ばしつつ、楽しく飲み食いしている。

【厨房】

料理を作ったり、サーバーからビールを注いだりなどして、忙しく立ち働いている羽月。

ホールから若い男の歌声が聞こえてくる。

ザ・ブルーハーツの『ラブレター』。

その歌声に顔を上げる羽月。

羽月「福丸——」

厨房を出る羽月。

【ホール】

ステージで歌っているのは羽月の同級生だった御園生福丸(21)。福丸を見つめる羽月。その視線に気づく福丸。羽月を見て満面の笑みを浮かべる

× × ×

閉店後の店内。カウンター席に並んで  
座り飲んでいる羽月と福丸。

羽月「まだやってたんやね『ひとりブルーハー  
ツ』。大学で軽音部入ってんやろ。バンドやっ  
てへんの?」

福丸「やってへん。俺はいつでも『ひとりブルー  
ハーツ』や。悪い?」

羽月「いや、悪いことないけど。いつもここで  
歌ってるのん?」

福丸「うん。アマチュアナイトの日は絶対」

羽月「そっか」

●インサート(回想)

【朔野高校軽音楽部・練習場】

舞台上に立ちブルーハーツの『夕暮れ』  
を真剣な顔で歌っている福丸。

棒立ち、無表情な顔でその様を見て  
いる羽月。(回想終わり)

羽月「居酒屋手伝ったりしてるのん?」

福丸「たまにな。親父がクソ偉そうに言う  
からかなわんで」

羽月「おばちゃんも元気? おいしかった  
よなあ、差し入れのおかきや煮卵」

福丸「元気すぎるくらいや。妹もよう手伝っ  
ててな、あいつが店継ぐわ。どこにおんね

鯛の姿造りできる女子高生。高校出たら  
割烹に修行に出るんや。『ヘタレのオニイ

はガツコのセンセくらいでちょうどや』  
やってよ。ほんま生意気なやつちゃで」

羽月「ははは——あんな、福丸」  
福丸「うん」

羽月「けっこう染みてんよ、あの『夕暮れ』」  
福丸「それやったらなんであの時つきあって

くれへんかってんよ」

羽月「ははは、ほんまやなあ」

福丸「笑てる場合ちゃうで」

羽月「はははは」

福丸「ほんまに……けど旨いなあ、このイカフェ」

羽月「それ、わたしが作ってんよ」

福丸「え、そうなん？ やるなあ。旨いわ」

羽月「——なあ福丸」

福丸「あんた、今、彼女は？」

福丸「いてへんよ」

羽月「そっか。あんな福丸。遅なっただけど、

わたし、あんたとつきあってもええよ」

福丸「え」

福丸、羽月をじっと見る。羽月も福丸を見つめて、うなづく。

福丸「——うーん。それはちよつと違うんや

なあ」

羽月「違うん？」

福丸「うん。俺、今でも羽月ちゃんのこと好きやし、つきあってほしいって思てるけど、

羽月ちゃんが今それを言うのは違うなあ」

羽月「そっか。そうなんか……」

福丸「なあ羽月ちゃん、またうたつてえや」

羽月「え」

福丸「ぼくは、うたつてる羽月ちゃんが好きやなあ」

羽月、うつむき首を何度か横に振る。

羽月「わたし、イカフェ作るんや。これから」

福丸「イカフェも旨いけどなあ」

イカフェを口にする福丸。厨房の中、

笑みを浮かべ洗い物をしている順花。

○都内、撮影スタジオ・中

音楽雑誌グラビア記事撮影中の新バ

ンドヘラ・フェイの四人。全員が

異なった黒のボンデー風衣装を着

ている。

その様子を見ている香帆。

撮影が終わり、香帆の元へ行く鈴奈。

鈴奈「牧原さん」

香帆「なに」

鈴奈「他の衣装の撮影はないのでしょうか」

香帆「他のって？」

鈴奈「だからこんな衣装じゃなく……」

香帆「ご不満？」

鈴奈「こんなの、恥ずかしいです」

香帆「全部わたしに任せたんじゃなかったの？」

鈴奈「そうですね……お母さんが見たら泣

きます、こんなの」

うつむく鈴奈をじっと見ている香帆。

ため息をついて。

香帆「お母さんねえ……ホントに売れる気あ

るんだか——みんなこっち来て！」

驚く鈴奈。香帆の元に来る光流、美咲、

愛佳。

香帆「あのね、きれいごとは言ってられない

の。最初に注目集めなきゃ意味がない。こ

れまでのイメージを大きく変えるの。『あ

のイモくさいバンドがこんなに変わったん

だ』って思わせるの。そのためのその衣装

よ。それ着てなきゃいくら光流の歌が凄く

たつて、あなたたちの演奏がキレてたつて、

メディアが取り上げてくれたりしないわ。

そうでしょ」

鈴奈『イモくさい』って……」

香帆「だってイモくさかったんだもん。特に

溪川さん。見た目も歌も。あれはわたしで

も手の施しようがないわ」

愛佳「……羽月のことを悪く言うのはやめて

ください」

香帆「まだ引きずってるかあ。確認させて。

あなたたち、わたしのプロデュースに従う

気は本当にあるの？ ないならわたしは光流を連れて降ります。どうなの？」

顔を見合わせる三人。

鈴奈「――任せます」

小さく頷く美咲と愛佳。

香帆「よし。じゃあいい機会だから今後の戦略を言います」

四人を見渡し不敵に笑う香帆。

○フリーマーケット会場

賑わっているフリーマーケット会場。

そのイベント広場で一人ギターを弾いている美咲。ヒットソングのサビをメドレーで次々と。

香帆（声）「あなたにはドブ板をやってもら  
うわ」

美咲（声）「ドブ板？」

香帆（声）「そう。日曜ごとにいろんなフリーマーケット会場を回るの。バンド演奏なんかのイベントを開催してるフリマの会場は多いのよ。幸せな家族連れにあなたの腕を見せてきなさい。〈ラ・フェイ〉の名前を売ってきて。その衣装着ろって言わないから安心してなさい」

美咲（声）「――はい」

ギターを弾き終える美咲。集まっていた客から大きな拍手。美咲、深く頭を下げてから。

美咲「ありがとうございます。連城美咲と言います。〈ラ・フェイ〉ってバンドでギターを弾いています。もうすぐファーストアルバムが出ます。聴いてもらえれば嬉しいです」  
再び大きな拍手が沸き起こる。

○新宿・ゴールデン街（夜）

その入口看板

○前同・とあるスナック・店内(夜)

カウンターの椅子に座り、弾き語りをしてる愛佳。

はしだのりひことシューベルツの『花嫁』をうたっている。

香帆(声)「あなたはドブ板その二。流しをやってもらうわ」

愛佳(声)「流し?」

香帆「ファーストもセカンドもあなたのメイソールカルの曲、一曲入ってたわよね。すごくよかった。アコギ弾けるのよね」

愛佳(声)「はあ、まあ。あの、流しって?」

香帆(声)「とりあえず十日以内にフォークソング二百曲覚えてちょうだい。あなたの相手は酔っぱらいよ」

愛佳(声)「フォークソング二百曲、ですか」

香帆(声)「わたしはヘラ・フェイ」を国民的バンドにしたいの。だから愛されるようなね。ゴールデン街でフォークの流しているメンバーがいるなんて、最高の売りになるわ」

歌い終え礼をする愛佳。酔客たちの拍手喝采。リクエストの声次々と。彼らを見て微笑み頷く愛佳。

○テレビ局スタジオ

バラエティー番組の収録現場。ジャー

ジを着てヘルメットを被っている鈴奈。

アナウンサー(声)「では問題。セピア色の

セピアとは、イカ墨のことである。マルカ

バツか?」

鈴奈「え? え? なに? ちょっとマジでわかんない!」

アナウンサー（声）「走ってください！」

鈴奈「分かんないってば〜っ！」

○と×が大きく書かれた二つのドアに向かつて走り出す鈴奈。

香帆（声）「あなたはテレビ向きの美人さん

よ。積極的にメディアに出てヘラ・フェイの名前を売り込むの。あなたがこのバンドの広報担当、そしてリーダーよ」

鈴奈（声）「リーダーって、わたし、そんなの」

香帆（声）「リーダーなの、あなたが」

×のドアへと突っ走る鈴奈。その勢いのまま飛び込む。割れるスチロールのドア。泥のプールに飛び込む鈴奈。  
大の字になったまま動かない。

アナウンサー（声）「残念！ 正解はマルでした！

猛烈な勢いで飛び込みましたが不正解！ 野々村さん、大丈夫ですかー？」

ゆっくり起き上がる鈴奈。泥まみれで座り込む。

鈴奈「…あの、ちょっといいですか」

アナウンサー（声）「はい、どうぞー！」

鈴奈、カメラを見据え。

鈴奈「ヘラ・フェイ」のリーダー、野々村鈴奈です。八月にファーストアルバム発売予定です。よろしくお願いします」

深く頭を下げる鈴奈。

アナウンサー（声）「いやあ、素晴らしいプロ

根性！ 皆さん、ヘラ・フェイ」を応援しましょう！」

鈴奈「買ってよね、マジで！」

テレビカメラを指さす鈴奈。

○ファッションショー会場

観客の若い女性たちで熱気あふれる会場。モデルがランウェイを歩いてくるたび歓



声があがる。登場する光流。

香帆（声）「光流、あなたは」

光流（声）「はい、分かっています」

香帆（声）「うん。パンフに〈ヘラ・フェイ〉の

ことは書いておくように頼んである」

ランウェイを堂々と歩いてくる光流。その

圧倒的存在感に息を飲む観客たち。ポーズ

を決める光流。大歓声が起きる。

○〈東萩フィッシングプール〉

フェンスにかけられた古びた看板。

○前同・釣り堀

椅子に座って釣り堀に竿を出している

羽月と福丸。

羽月「ありえへんよね、釣り堀でボウズって」

福丸「はは、なあ」

羽月「インケツやなあ」

福丸「インケツかあ。みんなでようやったよ

な、カブ。ジュースとかお好み代賭けて」

羽月「たいがいあんたが負けてた」

福丸「そうやったなあ。懐かしいなあ」

羽月「あんた、今月の『ロック・アラウンド・

ジャパン』読んだ？」

福丸「ん？ ああ、部屋にあるの読んだ」

羽月「出てたな、あの子ら」

福丸「うん。この前鈴奈ちゃんバラエティー

番組に出てたで」

羽月「そうかあ。鈴奈がテレビになあ――

ヘラ・フェイ〉かあ」

福丸「読んでんねや」

羽月「え？ ああ。店にあったのチラッと

見ただけや。もう読まんわ」

福丸「もう読まんか」

羽月「もう読まんなあ。なあ、福丸」

福丸「なに」

羽月「あんた、風俗とか行ったことあんのん？  
ソープとかやあ」

ギョツとして羽月を見る福丸。羽月、  
ポーッと水面を見たままで。

福丸「な、なんや急にいきなり」

羽月「行ったことあんのかって」

うつむく福丸。

羽月「あるよなあ。男の子やもんなあ。なあ、  
福丸」

福丸「な、なんよ」

羽月「わたしな、東京居てもなんもなかつ  
てん。歌詞書いて、練習して、ライブして、  
打ち上げて、レコーディングして、また  
歌詞書いて——そんなんばかりやってん  
よ、ほんまに」

福丸「羽月ちゃん」

羽月「インケツやなあ、ほんまに」

福丸「——なあ、羽月ちゃん」

羽月「んう？」

福丸「八月な、フェス行かへん？」

羽月「フェスう？」

福丸を見る羽月。

福丸「うん。知ってるやろ、滋賀のスキー場  
でやるへいぶきロックフェスティバル」。  
今年で十年目や」

羽月「へいぶきロック」かあ。出たかったなあ」

福丸「な、いっしょに行こうや」

羽月「あんたセンスないなあ。なにに誘ってん  
のよ。女の子にもてへんはずやわ」

福丸「あかんか？」

羽月「へいぶきロック」かあ……」

じつと水面を見ている羽月。

○東京・地下鉄構内

〈ラ・フェイ〉の四人がボンデージ風  
衣装を着て横並びに立っている、ファー  
ストアルバム発売の告知ポスターが貼  
られている。その前に立ってポスター  
を見ている女子高生四人組。  
電車が入ってくる。乗り込む四人組。  
ベルが鳴り、電車が発つ。

○名神高速道路（早暁）【八月】  
走っている軽自動車。

○軽自動車・車中  
運転している福丸。助手席の羽月。  
カーステレオからザ・ブルーハーツの  
『電光石火』が流れている。

福丸「いやあ、楽しみやなあ」

羽月「そうかいな。ああ、眠た」

福丸「嬉しいなあ、羽月ちゃんといっしょ  
にフェスや」

羽月「つきおうたる言うても『うん』言わへ  
んかった人間がなにを言うてるねん。アホ  
かほんま」

福丸「ははは、ほんまやなあ」

甲本ヒロトの歌声に合わせて歌いだ  
す福丸。

流れる車窓の景色をボーっと見ている

羽月。

羽月「電光石火、かあ……」

羽月、あくびをひとつ。

○いぶきロックフェスティバル・駐車場（早朝）  
すでに多くの車が止まっている駐車場。  
駐車する福丸。降りる。羽月も。

福丸「つきましたでえー！」

伸びをしてから羽月の前に手を差し出

す福丸。

羽月「は？」

福丸「手えつなごうや。初デートやねんで」

羽月「アホが……」

会場の方へ歩きだす羽月。

福丸「ええやんかあ」

福丸、羽月を追いかけ、並んで歩きだす。

羽月「一生ソープ通いしとけ、あんたは」

福丸「ひどいなあ」

不機嫌な顔の羽月。嬉しそうな福丸。並んで歩く二人。

○前同・メインスタンド・客席

到着する二人。スキー場に組まれた

巨大なステージ。

福丸「うわあ、ごっついなあ」

その威容に羽月も圧倒されている。

オールスタンディングの芝生席は六

分ほどの入り。

福丸「まだ余裕あるわ。前行こ、前」

観客エリア前方へ歩いていく二人。

○前同・メインスタンド・ステージ

舞台袖から客席を見ている香帆。

香帆「だいぶ埋まってきたわね」

振り返る香帆。ボンテージ風衣装

を着て立っているヘラ・フェイヴの

四人。

みな緊張の面持ち。

香帆「滑り込みで出場が決まったあなたた

ちが出ることを、観客のだれも知らない。

驚かせてきなさい」

頷く四人。

○前同・メインスタンド・客席

騒めきの中、ステージを見上げている前から二列目に立っている羽月と福丸。

○前同・メインスタンド・ステージ

舞台袖、香帆が去る。光流、観客エリアを見やったまま。

光流「美咲」

美咲「え」

光流「こんどわたしもフリーマーケットに連れて行ってよ。歌うから」

美咲「——うん」

光流「愛佳」

愛佳「なに」

光流「ゴールデン街の Snackbar ってすごく興味ある。いっしょに流しってのやりたい」

愛佳「——うん、やろうよ」

光流「鈴奈」

鈴奈「ん？」

光流振り向いて。

光流「こんど芸能人紹介してよ」

鈴奈「なんだそれ」

四人、笑う。光流真顔に戻って。

光流「あのさ——わたしはみんなに会えてよかったって思ってる。みんなの音で歌えて本当に嬉しいんだ。だからこのバンド続けたい。みんなといっしょに、どこまでも行きたい」

鈴奈「光流」

光流「なに」

鈴奈「そういうことは普段から口に出して言うように」

光流「だね、わたしの悪いところだ」

笑う四人。

光流「だからね——このステージ終わった  
ら溪川さんの電話番号やラインのアドレ  
ス、消去してほしい」

息を飲む三人。

光流「ひどいこと、すごいひどいこと言っ  
てるって分かってる。でも、わたしはみ  
んなとひとつになりたい。でも、でも、  
溪川さんのことを忘れられないみんなと  
はひとつになれない。〈ガロピーヌ〉の  
ことは忘れてほしい。溪川さんのことは  
忘れてほしい」

光流の目から涙が一粒こぼれる。

三人、光流を見つめて。

スタッフがやってくる。

スタッフ「開演です。〈ラ・フェイ〉の皆  
さん、よろしく願います」

立ち去るスタッフ。

鈴奈「よおっし、円陣組むぞ！」

愛佳「え、なに？」

鈴奈「リーダーの命令だよ。ほら、肩組ん  
で早く！」

四人、肩を組み円陣を作る。

鈴奈「いぶきロックフェス、オープニング  
アクト。ちなみにファーストアルバム発  
売日。これ以上ない舞台だよね」

三人を見やる鈴奈。頷く三人。

鈴奈「どこまでも行くよ、この四人で。今  
日がその第一歩め。楽しんでいこうよ——  
あ、そうだ。みんなに言っていないことが  
ひとつあった」

美咲「なによ」

鈴奈「わたし、この衣装嫌いじゃなくなっ  
てる」

笑う四人。

美咲「実はわたしも」

愛佳「あんたもかーい——ってわたしも  
だけど」

鼻をすすりながら何度も頷く光流。

鈴奈「よっしゃ！　へら・フェイ〜ぶち  
かますよっ！」

光流、美咲、愛佳「おうっ！」

四人、円陣を解き、ステージへ向  
かう。

○メインスタンド・客席

ステージに現れる四人。騒めく客席。

羽月、すぐに気が付く。福丸も。

福丸「え、え、嘘や。なんで——」

チューニング、セッティングをす  
るステージ上の四人を黙って見て  
いる羽月。

福丸「リストに名前なかったやん……なんで  
や——（羽月を見て）帰ろう。な、羽月ち  
ゃん帰ろう」

ステージの四人を見つめたまま、首を  
横に振る羽月。

福丸「羽月ちゃん……」

福丸、羽月の手を握る。ビクつとなる  
羽月。その手を握り返す。

○メインスタンド・ステージ

中央に立つ光流。スタンドマイクを右  
手で掴み、歌いだす。アカペラ。その  
歌いだしは静か。深く透明感ある歌声  
に、騒めいていた観客が徐々に静まり  
返っていく。歌声、クレッシェンド。  
最高潮に達したところで鈴奈のカウン  
ト。

美咲のギター、愛佳のベース、鈴奈の

ドラム、一斉に。マイクスタンドを蹴り上げ、一回転させる光流。一瞬で歌声を爆発させる。

飲み込まれてしまう観客。地鳴りのような歓声が沸き起こる。

× × ×

（ヘラ・フェイ）の圧倒的なパフォーマンス。ステージ狭しと動いて歌う光流。四人、時折顔を見合わせ頷き、微笑みあう。観客を煽る光流。歓声で応える観客。熱狂のオープニングアクトステージ。

× × ×

ステージが終わる。歓声と大きな拍手の中、舞台中央横並びにたつ四人。握りあつた手を大きく掲げる。大歓声。スタンドマイクを前にした鈴奈。

鈴奈「ボーカル光流！ ギター美咲、ベース愛佳！ ドラム鈴奈！ わたしたちがヘラ・フェイです！ え〜っつと…名前だけでも覚えて帰ってやあ！」

笑い声。沸き起こる歓声と拍手。

鈴奈「今日ファーストアルバム発売日です！ 買ってくださーい！」

大歓声。

鈴奈「絶対また会いましょう！」

やまない歓声と拍手の中、大きく手を振り舞台袖に消える四人。

○メインスタンド・客席

熱狂の余韻が残る観客エリア。羽月、スタッフが忙しく動いている舞台を無言で見つめている。声をかけられないでいる福丸。やがて羽月、福丸を見て。



羽月「帰ろうか」

頷く福丸。人いきれの中を、手を繋いで歩いて行く二人。

○車の中

帰路の車中。無言の二人。

福丸「ごめん、ごめんな」

羽月「ううん、ええねん」

福丸「知らなかったんや。出るって知ってたら連れてきてへん」

羽月「——みんな上手なってたなあ。美咲のギターはキレッキレで、鈴奈のドラムは音が踊ってた。愛佳のベース、えぐかったなあの子あんな響く音出せたんや」

福丸「羽月ちゃん」

羽月「あれが才能なんやなあ。百回生まれ変わっても、あの光流って子には追いつけないのやろうなあ——ええバンドやなあ。すごいところまで行きそうやなあ。なあ、福丸」

福丸「なに」

羽月「決心ついたわ、わたし」

福丸「決心ってなんのや」

羽月「歌やめることのや」

福丸「羽月ちゃん、俺そいうつもりと」

羽月「あなたの気持ちはよう分かっている。わたしもまだ未練あったんやけどな。でも今日あの子らのステージ観て決めた」

福丸「あの、あのな、俺……」

羽月「気にしないな。これが運命やってんよ。」

二回も叩きのめされたら、さすがになあ」

福丸「ごめん」

羽月「そやから気にせんでもええんやって。」

そやな、ラストライブだけはやろうかなあ」

福丸「ラストライブ」

羽月「うん。弾き語りでな。はじめや。一か

月後くらいかなあ。長いこと声出してへんから練習せんと。そうや福丸、手伝うてえや。後ろでギター弾いて。ええやろ」

福丸「ええけど——けど、ラストライブやなんて」

羽月「決めたんや、もう」

薄笑みを浮かべ、流れる車窓に目をやる羽月。

× × ×

渋滞中の名神高速道路上。車列の中、動かない福丸の軽自動車。

羽月「うっ、ぐっ……んぐっ」

驚いて羽月を見る福丸。羽月、右手を頭にやり、髪の毛をぎつく握りしめて泣いている。

福丸「羽月ちゃん……」

羽月「ひぐっ、んぐっう……」

声をかけられない福丸。

羽月「なんやのん、なんやのんあの子ら。あんな嬉しげに……恥ずかしいのん、あんな服着て……三枚目のアルバム、作るんやなかったん……あかん、あかんよな、そんなん思ったらあかん。わたし、ほんま最低やな……」

福丸「思ったかてええよ。なんぼでも思っただかてかまへんよ」

羽月「優しいな。ほんまに優しいな福丸。抱いて。抱いてえや福丸。からだバラバラになるくらい抱いてえや。慰めてえや。最初で赤ちゃんできたってかまへん。何回も何回も抱いてえや、なあ福丸」

福丸「羽月ちゃん……」

羽月「けど、けどな、あかんねん。わたし、これ以上あなたに甘えたら終わってしまう。ほんまになにもなくなってしまうね

ん——まっすぐ、おねがいやからまっすぐ帰って福丸。わたし、あんたがラブホ入ってもよう拒まん。流されてしまう。絶対あんたの優しさ求めてしまう。そやから、そやからまっすぐ帰って——んぐつ……」

福丸「——帰るよ、このまま」

羽月「なんやのん。帰らへんって言うてえや。わたし、断らへんのに……」

福丸、右手でハンドルを握ったまま、左手で羽月を抱き寄せる。福丸に寄りかかる羽月。

羽月「温いな……あんたやっぱり温いわ。ほんまはな、抱いてほしい。あんたに抱いてほしいんよ……ヘタレ、あんたほんまにヘタレやわ……アホかほんま……」

動かないままの車の中、羽月を強く抱きしめ続ける福丸。羽月、泣き続ける。

○ヘコッタパルル〈店内(夜)【一週間後】

カウンター席に座り、ひとり浮かない顔でビールを飲んでいる福丸。その前に立っている順花。

福丸「ほんまに悪いことしました」

順花「そんなことないんよ」

福丸「熱、まだ高いんですか」

順花「うん。今日で一週間。日中は七度八分。夜になったら八度五分。不明熱ってやつらしいわ」

●インサート

自室のベッドの上で寝ている羽月。苦し気に寝返りをうつ。

福丸「よっぼどシヨックやったんや。大丈夫かなあ」

順花「心配しいな。お医者さんも日にち薬や

いうてたし、おかゆもちゃんと食べてるし。明後日くらいには熱下がってケロツとなってるわ」

ステージを見る順花。慎太が岡林信康の『君に捧げるラブソング』をうたっている。

順花「あー、うっとうしい。なにを歌とるねん、あのアホは」

福丸「——ケロツとはならん思います」

順花「うーん、そやなあ。さすがになあ」

福丸「ラストライブやなんて、どうにかならんのかな。ほんまにもう決めてんのかな」

順花「うん。決めてるなあ。子どものころから言い出したらきかんところがあるからなあ」

福丸「『いぶきロック』なんか連れていかへんかったらよかった……」

うつむく福丸。

順花「福丸くん」

福丸「(顔を上げ) はい」

順花「福丸くんは、羽月のどこが好きなん？」

福丸「え？ それはやっぱり元気ええとこっていうか。パーっと明るいところっていうか。笑った顔めっちゃかわいし。けど、戻ってきてからは全然笑わへんし——なんか見てるのが辛くて。それに」

順花「それに？」

福丸「羽月ちゃんは、やっぱり歌ってへんとあかんのや。羽月ちゃんの歌になにもないなんてこと、あらへん。絶対そんなことないんや。ぼくは、羽月ちゃんの歌が好きや。うたってる羽月ちゃんが好きや」

順花「そうかあ。メロメロやなあ——よっしゃ、福丸くんのためにも一肌脱いだる

わ！」

福丸「え？」

順花「福丸くん。羽月に笑った顔取り戻す

ことができるのは、今のところ世界でたつ

たひとりの男だけや」

福丸「世界でひとりの男——」

うたっている慎太を見る福丸。

順花「アホ。あのボンクラなわけないやろ」

うたい続ける慎太を笑って見ている順

花。

○ヘコッタパルル〓入口(夜)【二か月後】

《溪川羽月ラストライブ》の黒板掲示。

○前同・店内(夜)

ステージでリハーサル中の羽月と福丸。

泉谷しげる『二度とない人生だから』を

歌う羽月。

○路上(夜)

ギターケースを背負って歩いて行く男の  
後ろ姿。

○ヘコッタパルル〓店内(夜)

羽月のラストライブが始まる。アコース

ティックギターを肩掛けにして椅子に座っ

ている羽月。斜め後ろに同じくアコース

ティックギター肩掛けで立っている福丸。

客席、テーブル席に五十人ほどの客。

羽月「こんばんは。今日はお集りいただきあり

がとうございます。子守歌みたいに聴いてい

たCDがあつて。だから最後にその人の——

泉谷しげるの曲を演って終わりにしたいと思

います。(福丸を見て)じゃあ、行こうか」

ギターを弾き出す羽月。

『春のからっ風』をうたう羽月。

× × ×

『街はばれえど』をうたう羽月。

× × ×

『陽が沈むころに』をうたう羽月。

× × ×

『里帰り』をうたう羽月。

× × ×

『眠れない夜』をうたう羽月。

× × ×

『土曜の夜君と帰る』をうたう羽月。

× × ×

羽月「最後の曲になります。本当に最後の曲です。今日はありがとうございました。

聴いてください『終わりを告げる』——」

『終わりを告げる』をうたい始める羽月。

× × ×

うたい終える羽月。静かな拍手が起き、礼をする。振り返り福丸を見る。少し微笑み何度も領き涙を拭う。ステージから去ろうとしたその時——。

男の声「てめえ溪川！ 山口百恵気取ってん

じゃねえぞこの野郎！」

舞台袖から現れる泉谷しげる。

羽月「んええっ！？」

泉谷「まったく辛気臭え歌ばっかりうたいやがってよお——あ、全部俺の歌か」

客席から笑いが起きる。拍手が沸き、

指笛も鳴る。

羽月「ちよっ、あの——」

福丸を見る羽月。

福丸「お客さんもみんな知ってた」

笑う福丸。カウンター内に立っている順花を見る羽月。順花、どうだと言わんばかりの笑みを浮かべている。

泉谷「『火の鳥』カバーしてくれてありがとうよ。けどよ、菓子折りくらい持ってこいバカ——懐かしいなあ。大昔ここで演ったところあるんだよ。先代のころだ。拓郎たちとフォーライフ作ってすぐだったな、あれは」  
羽月「ここで」

泉谷「ああ、そうだよ」

羽月「あ、あの、あのなんで、今日」

泉谷「なんでもクソもねえよ。このママから事務所に達筆のお手紙あったの。それ読んだの。だから来たの。来るだろ普通」

羽月「——普通、来ない」

泉谷「俺は来るの！ 文句あんのか！」

爆笑する観客。

羽月「あの、あの」

泉谷「なあ溪川。おまえ歌やめるのか？」

羽月「——」

泉谷「歌やめるのかって訊いてんの！」

うつむき、頷く羽月。

泉谷「バカ！ おまえは本当にバカだ！」

ギターをかき鳴らし始める泉谷しげる。

客席に向かって叫ぶ。

泉谷「おい、おまえら聞け！ 知ってると思うがよ、この溪川羽月は前のバンドでめえだけクビになってよ、ここに戻ってきたんだ。あんたにやなにもない、つってクソ生意気な女マネージャーに言われたんだってよ。それでふてくされて歌やめるつってんだ。（羽月を見て）ほんとにバカだおまえは溪川！」

羽月、叫ぶ泉谷を見ている。泉谷、一

旦ギターを弾きやめ、羽月を見る。

泉谷「あのよ溪川。こんないい小屋がある家に住んでてだよ、こうやって歌聴いてくれ

る客がいてだよ、後ろでギター弾いてくれる色男がいてだよ、なにもないってことがあるのかよ。そうだろ？ なあ」

またギターをかき鳴らし始める泉谷。

福丸も続く。

泉谷「おい！ 俺は怒ってるぞ溪川！ 激しく怒ってる！ 『なにもない』だあ？ 上等だよ。上等じゃねえかよ。なにもない奴がよ、それでもありったけの気持ちかき集めてよ、なにもない奴らに向かってうたうんだろうよ。それがロックだろう！ それがフォークソングだろう！ てめえそんなことも分からないでうたってたのか！ だつたらほんとに歌なんかやめちまえ、このバカ！」

ギターのネックを強く握りしめる羽月。

泉谷「俺はうたうぞ！ おまえもうたえ溪川！」

『野性のバラッド』をうたいたす泉谷しげる。

福丸「羽月ちゃん！」

福丸を見る羽月。福丸、笑って頷く。

うつむく羽月。

泉谷「立てえ、おまえら！」

観客を煽る泉谷しげる。立ち上がる観客。

間奏、二人のギターに合わせて手拍子を始める。

泉谷「オイ、オイ、オイオイオイオイ！」

観客「オイ、オイ、オイオイオイオイ！」

手拍子、激しく。

泉谷「オイ、オイ、オイオイオイオイ！」

観客「オイ、オイ、オイオイオイオイ！」

手拍子、ますます激しく。

泉谷「歌ええ溪川！ 知ってんだろ！」

羽月、顔を上げる。「オイオイ」の声と

手拍子の中、泉谷を見る。福丸を見る。

順花を見る。マイクスタンドの前に立つ。



観客を見渡す。キツとまなじりを決して。

羽月が、うたいだす。

歓声と拍手が沸き上がる。

泉谷「そうだ、うたうぞ！」

ユニゾンでうたう二人。ギターをかき鳴らしながら福丸が叫ぶ。

福丸「羽月ちゃん！」

振り返り福丸を見る羽月。

福丸「大好きや！ ほくは羽月ちゃんが大好きや！ ずっとずっと好きや！」

羽月、頷き、弾けるように笑う。

福丸「うわあ！ 羽月ちゃん、愛してる！」

羽月「福丸、愛してる！」

泉谷「おまえらどこで乳くりあってたんだ！」

羽月「うっせえ！」

泉谷「溪川！ おまえはここでうたい続けろ！」

羽月「言われんでも分かってるわあ！」

泉谷「このクソガキやあ！」

羽月・泉谷のユニゾン。

順花と慎太が笑ってカウンターのの中から

ステージを見ている。

泉谷「まだまだやるぞ、オールナイトだ！」

羽月「分かったか、オラあ！」

ステージの三人、ギターをかき鳴らし、

タイミングを合わせ終音。両手を突き

上げる羽月。

羽月（声）「わたしはまた、うたいはじめた」

○ヘラ・フェイの快進撃ぶりがコンサート風景を中心に映し出される。

羽月（声）「ヘラ・フェイ」はデビューアル

バムで一位を獲得。わたしがあの三人と会う

ことは、それから五年間なかった」

●日比谷野外音楽堂

コンサートの様子・

〈TⅡ一年目 初の全国ツアー開催  
最終日・日比谷野外音楽堂〉

光流「ついで来いやあっ！」

大歓声で応える観客。

●日本武道館・外景

開演前の長蛇の列。

※同・館内

鈴奈の声が響く。

鈴奈（声）「ヘラ・フェイ」です！ 名前だ

けでも覚えて帰ってやあ！」

大歓声とともに開演。

〈TⅡ二年目 再度の全国ツアー開催

最終日 日本武道館〉

〈TⅡセカンドアルバム ミリオンセ

ラー達成〉

●横浜アリーナ・外景

※同・アリーナ内

ステージで圧巻のパフォーマンスを繰

り広げている四人。

〈TⅡ三年目 全国アリーナツアー開催。

最終公演横浜アリーナ2DAYS チケッ

ト即日完売〉

〈サイドアルバム ミリオンセラ〜

●東京ビッグサイト

最先端の服を身にまとい、ランウェイを

歩いてくる四人。観衆から歓声が沸き上

がる。

〈TⅡ四年目 東京シティレディースコ

レクションにモデルとして全員出演〉

〈TⅡベストアルバム ダブルミリ

オン達成〉

●五大ドームコンサートの様子

【札幌ドーム】(T) 全景↵

マイクを観衆に向けて煽る光流。

【ナゴヤドーム】(T) 全景↵

激しいギターソロの美咲。

【大阪ドーム】(T) 全景

フォークギターを奏で歌っている愛佳。

【福岡ドーム】(T) 全景

ドラムソロ。髪を振り乱しスティックを振るう鈴奈。

【東京ドーム】(T) 全景

ステージ中央に並び立っている四人。

鈴奈「じゃあ、いくよ！　〈ラ・フェイ〉です！

せーの！」

四人、繋いだ手を振り上げ叫ぶ。

四人「名前だけでも覚えて帰ってやあ！」

歓声が怒涛のように沸き上がる。

〈TⅡ五年目 五大ドームツアー敢行

大成功の裡に終わる〉

● へいぶきロックフェス ステージ(夜)

〈ラ・フェイ〉のステージ。登場する四

人。立錐の余地もない観客エリアが沸き

立つ。スタンドマイクの前に立つ光流。

光流「こんばんは。わたしたちの旅はここから

始まりました。あの日はオープニングアクト

でした。今日はラストをとめます。まだまだ

だわたしたちの旅は続きます——じゃあ、い

くよお！」

鈴奈のカウント。始まる熱狂のステージ。

舞台袖で香帆が四人のパフォーマンスを

見ている。

(F・O)

○ 朔野高校・体育館地下の廊下

並んで歩いていく羽月と福丸。

福丸「懐かしいやろ」

羽月「そやなあ」

○前同・軽音楽部練習場

ドアを開ける二人。部員たちが二人を見る。

福丸「約束どおりつれてきたったぞ」

二十人ほどの部員たちが二人の前に駆け寄ってくる。

部員たち「こんにちは!」

羽月「はい、こんにちは——って運動部やないねんから。どんな教育してんねん御園生先生」

福丸を見る羽月。笑いが起こる。部長の江藤紗彩（17）が羽月の前に立つ。

紗彩「はじめまして。部長の江藤紗彩です。

あの、えっと、先輩」

羽月「なに?」

紗彩「福ちゃんのどこが好きですか?」

羽月「そうやなあ、ヘタレなところかなあ」

福丸「おおい」

爆笑する部員たち。ひとりの女子生徒が羽月の前に押し出されるように。紗彩の横に立つ。

真菜美「あ、あの……」

羽月「ん?」

紗彩「ほら、ちゃんと喋らんと。あこがれの

羽月さんやで」

真菜美「……新野真菜美と言います。へガロピー

ヌ、小学校のころから聴いています。羽月さ

んがここの軽音出身だって知って、この学校

入りました。軽音部に入りました。インディー

ズのアルバム、三枚全部持っています。あの、

あの、本当に大好きです」

羽月「ありがとう。嬉しいわ。真菜美ちゃん楽

器はなにやってんの?」

真菜美「ひとりでアコギ弾いてへガロピーヌ

と羽月さんの歌、うたってます」

羽月「ひとりへガロピーヌか。やるやん」  
真菜美「羽月さんの歌が好きです。あの、な  
にかうたってください」

福丸を見る羽月。頷く福丸。

× × ×

ギターを手に演台に上がろうとする羽  
月。そのとき、壁に飾ってある歴代卒  
業部員たちの集合写真に目を止める。

自分の代の写真の前に立つ羽月。笑顔  
のへガロピーヌ。四人が映っている。

写真を撫でる羽月。

ステージに立つ羽月と福丸。

羽月「えっと、じゃあ、ザ・ブルーハーツの  
『夕暮れ』って曲を演ります」

ぎよっとする福丸。

羽月「この歌は、御園生先生がわたしに告白  
する時にここでうたってくれた歌です」

嬌声があがる。背中を向ける福丸。

羽月「わたしその時ふっしてもたんやけどね  
そやかてダサイやん、歌うたってからコク  
るなんかやあ。間あ持たへんで困ったわ」  
手を叩き爆笑する部員たち。

羽月「けど御園生先生はわたしのことずっと  
好きでいてくれてんよ——（福丸を見て）  
ほら、いつまでも後ろ向いてんと、ギター  
弾いてや先生」

苦笑しながら前を向く福丸。「福ちゃ  
んマジ最高！」女生徒の声。

福丸、ギターを奏で始める。羽月も。  
うたい始める羽月。

（羽月の歌声をバックに、高校時代の  
思い出の数々がインサートされる）

●練習場で音合わせをしているへガロピーヌ  
の四人。

●練習場、他のバンドが音合わせをしている。

隅っこでカブをしている四人と福丸。

●夏合宿。花火に興じる部員たち。手に持った花火を振り回しながら福丸を追いかける羽月。大笑いしてそれを見ている三人。

●スクールロックフェスティバル、ステージで演奏する四人。

●前同・結果発表。ガロピーヌの金賞を告げる司会者。ステージ上で飛び跳ね、抱き合って喜ぶ四人。

●学校からの帰り道。並んで帰る四人。笑いあい、心から楽しそうに歩いていく。

羽月「真菜美ちゃん、おいで。いっしょに演ろう。ずっとうたってなかったんやけど、なんか今日うたいたいわ、〈ガロピーヌ〉」

真菜美「は、はいっ！」

ギターを取りにいく真菜美を微笑んで見ている羽月。

○都内・音楽スタジオ

メインスタジオにいる美咲、愛佳、鈴奈の三人。

鈴奈「おそいね」

愛佳「いつものことじゃん」

無言の美咲。

○前同・入口

ハイヤーが着き降りる光流。あくびをしながらダラダラとスタジオに向かう。

○前同・メインスタジオ

入ってくる光流。四人に挨拶はない。

鈴奈「じゃあ、やろっか」

スタンバイの後、新曲を演奏する四人。伸びない光流の声。歌詞を忘れ、途中でうたうのをやめる。三人も演奏をや

める。

美咲「なにそれ光流。歌詞入ってないってどういうこと。声も全然出てないし。やる気あるの?」

光流「あんまりない、って言ったら?」

美咲「いいかげんにしなよ」

光流「あのさ、そもそもこれって意味ある?」

美咲「どうということよ」

光流「だからなんでいつも最初に納得いくまで合わせるのかって。別録りでいいじゃん。

コンサート前にちゃちゃっと合わせたらいいことなんだから」

愛佳「光流、わたしたちずっとそれでやってきたんだし」

光流「ずっとねえ。ていうかさ、なんでロスのスタジオ押さえられなかったの? わたし前から言ってたよね」

愛佳「押さえられなかったんじゃない。美咲がここで録るって決めたんだよ」

光流「はあ? なにそれ」

愛佳「分かってるでしょ。今度のアルバムは美咲が全面的にプロデュースするんだよ。

慣れてるところで録るのがいちばんいいに決まってるじゃない」

光流「慣れるところねえ——やめた、帰る」  
スタジオを去ろうとする光流。

美咲「光流っ!」

光流「喉の調子悪いんだよ。次は納得いく歌うたってあげるよ。プロデューサーさん」  
出ていく光流。

ドラムセットの前から立ち上がる鈴奈。

鈴奈「あの、ごめん」

鈴奈を見る美咲と愛佳。

愛佳「収録?」

鈴奈「シナリオ上がってくるの遅くってさ。

さつきラインがあって」

美咲「いいよ、いきなよ」

鈴奈「ごめん、ごめんね。わたしリーダーなの  
に最近全然バンドのこと——」

美咲「そういうのホントいいから。鈴奈、あ  
んな最近芝居がかった物言いしすぎ。正直  
気色悪い」

にらみ合う美咲と鈴奈。スタジオを出  
ていく鈴奈。

愛佳「美咲、ちょっと言い過ぎだよ」

美咲「分かって言ったんだよ。女優さんとき  
たまんだって」

ギターを肩から外し壁に寄りかかって  
座る美咲。

愛佳「撮られてたね光流」

美咲「ん？」

愛佳「ほら、写真誌に」

美咲「ああ、毎晩クラブで大騒ぎしてるって  
やつ」

愛佳「うん。大丈夫かな、あの子」

美咲「歌だけちゃんとうたってくれたらいい  
んだよ」

愛佳「それでいいの？」

美咲「うん、それでいい」

愛佳「——美咲」

美咲「なによ」

愛佳「わたしたち、これからもまだ先に行け  
るって思ってる？」

美咲「はあ？ なによそれ。思ってるに決まっ  
てるじゃない。だから今度のアルバムもわ  
たしがプロデュースして——」

美咲をじつと見つめる愛佳。

美咲「こんなの、バンドにはよくあることだ  
よ。ここ乗り越えなきゃ」

愛佳「ごめん美咲。わたしは乗り越えられるっ



て思っていない」

美咲「愛佳」

愛佳「思っていないんだ」

美咲「そう」

黙り込む二人。

○都内のクラブハウス（夜）

ハウスミュージックが大音量で流れる

店内。酩酊した光流が男に肩を抱かれ、  
はしゃいでいる。

○コッタパルル・店内

営業前。モップを手にして店内の掃除  
をしている羽月と福丸。

羽月「そうや。なあ、スクールロックフェス、  
どうなったん？」

福丸「真菜美だけ近畿大会突破や」

羽月「おー。ギター一本でようやくたな」

福丸「ひとりガロピーヌで全国大会や。嬉し  
い？」

羽月「そりやまあ、な」

福丸「あいついつも言うてる。『羽月さん  
の歌詞を、もっと大勢に知ってもらいたい』  
いうて。なんにもない、なんてこと、なかっ  
たんとちがう？」

福丸、羽月を見て。

羽月「——アホ」

微笑みあう二人。また掃除を始める。

入口ドアが開く。気づく羽月。

羽月「すみませーん。六時からなんです——つ  
て真菜美ちゃん」

真菜美が立っている。隣には紗彩も。

福丸「どないしたんやおまえら。学校で練習  
してたんやなかったんか」

紗彩泣き出す。

福丸「おい、なんかあったんか江藤」

真菜美「先生、ニュース見てはらへんのですか」

福丸「なんのや」

真菜美「逮捕されました」

福丸「誰がや」

真菜美「ヘラ・フェイ」の光流さんです」

福丸「ええっ！　なんでや？」

羽月も驚く。激しく泣き出す紗彩。

真菜美「違法薬物所持で昨日の夜中。マン

ションに警察が入って見つけたそうです」

羽月「違法薬物……」

真菜美「『自分で使うために持っていた』って言ってるそうです。半年以上前から」

紗彩「なんで、なんでやのん。そんなんありえへん……大好きやったのに……ずっと懂れてたのに……」

泣き続ける紗彩を横抱きにする真菜美。

真菜美「女子みんな泣いてます。練習なんかできません。わたしも歌えません。みんながそんなやのに、わたしだけ羽月さんの歌、ガロピーヌの曲、練習なんかできません。先生、わたしらどうしたらええんですか」

言葉を失う福丸。

真菜美「羽月さん」

羽月もなにも答えられないまま。

○テレビ放送・ワイドショー番組

大手CDショップで店員がヘラ・フェ

イ」のCDを撤去している様子が映し

出される。画面切り替わってスタジオ。

司会者が芸能リポーターに質問をする。

司会者「衝撃の逮捕から一週間。すでにどこ

のCDショップへ行ってもヘラ・フェイのCDを見つけることはできません。えー、芸能リポーターの井川さん。水原容疑者、逮捕の余波はまだまだ広がっていきそうですよね」

井川「はい。ドラマ主題歌として一曲、CMソングにも三曲起用されましたが、すべて打ち切りです。来年には二度目のアリーナツアーも予定されていましたが、これも打ち切りでしょう。その影響ははかりしれません」

司会者「ヘラ・フェイ」ですが、その今後はどうなると思われますか」

井川「はい。おそらく解散ということになると思われます」

司会者「やはり解散ですか」

井川「ええ。最近はメンバー間の不仲も漏れ聞こえていました。今回の水原容疑者逮捕に際して、他のメンバー三人がなにもコメントを発せず沈黙していることから、それはうかがえます。下手にかばって同じような目で見られるのは嫌なのでしょね。解散後はそれぞれの活動に専念するのではないでしょうか」

司会者「時代を牽引していたと言ってもいいガールズバンドヘラ・フェイ」の終焉はあまりに残念なものになってしまったようです。では、次のコーナーです」

テレビ画面、ブツツと消える。

○芸能事務所・本社ビル

入口に芸能リポーターたちがたむろしている。タクシーが着く。降りる鈴奈。リポーターから質問責めにあい、もみくちゃにされながら本社ビ

ルに入っていく鈴奈。

○前同・ビル廊下

歩いていく鈴奈。

○前同・小会議室

入っていく鈴奈。中には美咲、愛佳。

対峙して社長の松崎が座っている。

愛佳の隣に座る鈴奈。

鈴奈「リポーターうざっ」

四人、しばらく無言。

松崎「ま、事務所としては、今回の事で見たちとの契約を切ることはないから安心していい」

美咲「当たり前ですよ。わたしたちなにもしてないんだから」

松崎「だな。で、バンドだけだな」

鈴奈「言われなくても分かってます」

松崎「そうか。じゃあ後は三人で話し合っ  
て、正式な結論を持ってきてくれ」

小会議室を出ていく松崎。

美咲「鼻が効いたよね」

鈴奈「あ？」

美咲「だから牧原さん」

鈴奈「ああ」

●インサート・レッスン場

アイドルグループ練習生八人がダンス

レッスンをしている様子を見ている香帆。

美咲「なんかこうなること分かってたんじゃない、あの人」

鈴奈「はは、確かに。泥船から一抜けた、か」

愛佳「もう、やめようよ」

麗奈「——じゃあ、解散ってことで」

美咲「うん。愛佳は？」

愛佳「仕方ないよね」

黙り込む三人。愛佳のスマートフォンが鳴る。スマホを手取る愛佳。表示された覚えのない番号に訝しみながら、耳に当ててみる。

愛佳「——もしもし」

羽月（声）「もしもし」

愛佳「え」

羽月（声）「久しぶり〜。おばちゃんに携帯番号教えてもらってかけました〜。おばちゃん心配してたよ。たまには電話くらいしてあげやなあかんで」

愛佳「は、羽月っ!？」

驚いて愛佳を見る美咲と鈴奈。

○東京タワー・全景（夜）

○前同・トップデッキ（夜）

夜景を見ている羽月。エレベーターのドアが開く。美咲、愛佳、鈴奈、

羽月の数メートル後ろで立ち止まる。

振り返る羽月。三人を見てから、また夜景に目を移す。

羽月「懐かしいなあ。会うんやったらここかなって思ってたなあ。相変わらずのアホやろ」

愛佳「羽月」

羽月「携帯の番号やラインのアドレス変えたの、わたしとあんたらと、どっちが早かったんやろな——あんな、わたし来月籍入れるんよ、福丸と」

鈴奈「福丸くんと」

羽月「うん。あんたらの最初のいぶきロックフェス、福丸と観にいったんよ。あんたらが出るの知らんと。はは」

美咲「羽月」

羽月「福丸な、今な、朔高で日本史の先生してんねん。軽音の顧問もやってるんよ。わたしも、ときどき練習見に行ったりしてるんよ。今度なへガロピーヌの弾き語りでスクールロックの全国に女の子一人出るねん。けど他の女子部員が演ってるのはへラ・フェイ」

三人に背を向け、話を続ける羽月。

羽月「女の子バンド四組あるけど全部へラ・フェイ」や。文化祭でどの曲演るかでもめてるわ。演るんよその子らへラ・フェイ。泣きながら練習してる。今日のわたしの往復の新幹線代な、部員全員が出してくれたもんや。断ることもできたけど受け取った。気持ちやからなあ。『今、三人と話してできるのは羽月さんだけです』言うてなあ」

振り返る羽月。

羽月「部員の子らからな、手紙渡されてん（手にしていた紙袋を差し出す）あんたら宛てのと、水原光流宛てのが入ってる」

羽月を見つめる美咲、愛佳、鈴奈。

羽月をただ見つめる三人。

羽月「あんたら三人に会ったら伝えてほしいことあるかって訊いたらな、みんな一生懸命相談してた。今から伝える——『光流さんを許してあげてほしい。支えてあげてほしい。みんな仲良くしてほしい。へラ・フェイ』を解散しないでほしい』やて」

紙袋を床に置く羽月。

羽月「なあ、世界の全部が敵に回ったかて、あんたらだけはあの子の味方でいてやらなあかんのとちがうん？」

無言の三人。

羽月「帰るわ。手紙、ちゃんと読んでや。  
ちゃんと渡してや」

無言の三人の顔を横切っていく羽月。  
エレベーターの中に姿を消す。

○前同・エレベーターの中（夜）

降りていくエレベーター。東京の夜  
景を見ている羽月。

○前同・トップデッキ（夜）

立ち尽くす三人。やがて愛佳が駆け  
出し、紙袋を胸に抱え、そのまま踵  
を返しエレベーターへ。美咲と鈴奈  
も続く。愛佳、何度も降りのボタン  
を押し続ける。

○路上（夜）

東京タワー前の路上。歩いていく  
羽月。

愛佳「羽月！」

振り向く羽月。三人が立っている。

羽月「あんたらもアホやなあ。ダツシユ  
で駆けつけやなあかん人間まちがえて  
どうすんの——美咲」

美咲を見る羽月。

美咲「羽月」

羽月「愛佳」

愛佳を見る羽月。

愛佳「羽月」

羽月「鈴奈」

鈴奈を見る羽月。

鈴奈「羽月」

羽月、少し笑って頷く。

葉月「ほな、な」

踵を返し去っていく羽月。愛佳、紙

袋を抱えてうずくまり嗚咽する。美咲と鈴奈、泣きながら、小さくなる羽月の背中をじっと見ている。

○湾岸警察署・留置所・面会室【翌日】

係員に連れられて入ってくる光流。

アクリル板の衝立越しに座っている

美咲、愛佳、鈴奈。光流、椅子に座りうつむく。しばらく無言の四人。

光流「謝ってほしいわけ？」

鈴奈「ん？」

光流「だから来たんでしょ」

愛佳「おー、相変わらずの女王様モード全開」

鈴奈「ええ感じで憎たらしいなあ」

美咲「ほんまに」

光流「分かってるわよ。解散言いに来たんでしょ。それでいいよ。厄介払いできてあんたたちも——」

顔を上げる光流。

光流「え」

三人、微笑んで光流を見ている。愛佳、手にしていた紙袋の中から、パンフレットを取り出し、光流に見せる。

愛佳「じゃーん。覚えてる？ 最初の全国ツアーのパンフや。わたしらの後輩のお姉ちゃんの宝物やねんて」

愛佳、パンフに目を落とす。横から美咲と鈴奈ものぞき込むように。

鈴奈「懐かしいなあ、この衣装」

美咲「みんなまだ若いわあ。愛佳なんかぶくぶくやん」

愛佳「うるさいわ。最初は富山や。さすがに緊張したなあ」



美咲「鈴奈、カウントで思い切り声が裏返ってた」

鈴奈「そやったな。覚えてる」

美咲「新潟、山形、秋田、青森。日本海側北上して北海道は札幌と函館。光流、あんた『ワカサギ釣りしたい』言うたの覚えてる？ 冬でもないのに。『北海道の湖つてずっと凍ってるんじゃないの』やて。みんな爆笑や」

鈴奈「あったなあ。なあ、初めて露天風呂

四人で入ったんどこやった？」

美咲「あれは——岩手やな。花巻温泉」

愛佳「すごい星空やった」

美咲「あ那时候や。光流が星座に詳しいって知ったん」

鈴奈「びっくりしたな、あれ」

愛佳「わたし、あれから露天風呂入るとき、光流に星座教えてもらうの、めっちゃ楽しみやったわ」

光流、またうつむく。涙をこぼす。

愛佳「なあ、あれどこやった。手違いでわたしら四人だけ宿が取れてへんくて……」

美咲・鈴奈「高知！」

愛佳「そうや高知！」

美咲「よさこい祭りの当日でな、大きなホテル全部満室。で、結局泊ったんラブホ」

鈴奈「電飾あげつないホテルやったな」

愛佳「光流が緊張しててやあ。『ねえ、ほんとにここに泊まるの？』やて。半泣きやった」

美咲「いちばん純情やったもんなあ」

笑う三人。

愛佳「このパンフにな、全員のサイン書いて送り返してあげやなあかんのよ。そないせんとな、これ送ってくれたわたしら

の後輩の女の子、元ヤンのお姉ちゃんにシバキ回されるねんて。ちゃんと書いたってや」

鈴奈「なあ光流。満天の星空も、ピカピカの電飾も、また四人でいっしょにみたいなあ。思わへん？」

光流、ボロボロと涙をこぼし泣く。

#### ○湾岸警察署・前【一か月後】

多数の報道陣が待ち構えている。歩いてくる光流。無数のフラッシュが光る。光流の後ろから美咲、愛佳、鈴奈。報道陣からどよめきがおきる。

立ち止まる光流。まっすぐ前を見据え。

光流「わたくし、水原光流は約半年前から違法薬物を所持し、使用してました。あの、あの――」

言葉につまる光流。後ろから鈴奈がその背をさす。頷く光流。

光流「応援していただいているファンの皆様を裏切り、傷つけてしまいました。お仕事でお世話になっている方々に、多大なご迷惑をかけてしまいました。ごめんなさい。本当にごめんなさい」  
深く頭を下げる光流。激しく光るフラッシュ。三人が前に出る。光流に並び立つ。頭を下げる三人。  
フラッシュの嵐。

#### ○都内の道路

走っているワンボックスカー。  
それを追うように五台の車。

○前同・ワンボックスカー車中

後部座席に愛佳、光流、美咲。光流の手を強く握っている二人。車

載テレビが、湾岸署前で続く鈴奈の会見を映し出している。運転し

ているのは「ガロピース」のマナージャーだった岡崎。

光流「わたし、やっぱり残ってちゃんと——」  
愛佳「ええんやって。こういうときのためのリーダーや」

テレビを見る三人。

リポーター①「《では、〈ラ・フェイ〉の解散はないと?》」

鈴奈「《はい、ありません。事務所とレコード会社との話し合いはこれからいたします。ただわたしたち四人に解散の意思はありません》」

リポーター②「《今、テレビを観ているファンの方になにかメッセージはありますか?》」  
鈴奈「《水原光流は間違いを犯しました。これからは彼女にわたしたちが寄り添います。二度と彼女が違法薬物に手を染めることのないよう寄り添っていきます》」

リポーター②「《メンバー間の不仲がとりざたされていましたが、どういった心境の変化があったのでしょうか》」

鈴奈「《噂です。不仲でもなんでもありませんよ》」

愛佳「うわ、こいつしれつと嘘言うた!」

叫ぶ愛佳。爆笑する美咲。

美咲「女優さんですから!」

苦笑の光流。

リポーター③「《バンドとしての活動を再開するつもりなんですネ》」

鈴奈「《はい。しかるべき時にそのご報告

ができればと思っています。光流から歌を奪わないでください。彼女には歌が必要ですよ。一度の間違いで彼女から歌を奪わないでください。お願いします」

うつむく光流。涙をこぼす。

リポーター③「《ちょっと待ってください。

裁判もまだの時点でそれを言うのは時期尚早なのではないですか》

鈴奈「《分かっています。でもお願いです。

光流に歌を失わせたくないんです。《ラ・

フェイ》を失わせたくないんです》

リポーター③「《それは手前勝手じゃないですか。それに一度の間違いというのは甘い考えに思えてなりません》」

鈴奈「《一度の間違いやないの！ そやからわたしが二度とあの子にクスリなんかやらさへんって言うてるやん！

一回失敗したら二度とやり直しできひんのん！ 手前勝手のなにか悪いのん！》

フラッシュの乱舞。

美咲「あーあ、鈴奈やってもうた。ネット大炎上やな、これは」

愛佳「どないする岡崎。なんか頭下げる角度、深なつたみたいやで」

岡崎「まあ、謝罪にお金はいらないから」

美咲「——あんた、長らく見いひんうちに人間的に成長したな、なんか」

愛佳「頼むでえ岡崎。前みたいにキャバ嬢にラインしまくってたらまた替えてもらうで、ほんまに」

岡崎「あ、それ大丈夫。ボク今、キリカちゃんと同棲してるんで」

愛佳「はあ、キリカちゃん？」

岡崎「うん。本名山村理恵ちゃん。料理上手の二十四歳。半年連続指名ナンバー

ワン」

美咲「ちよっと。もしかしてキャバ嬢落としたん、あんた？」

岡崎「『落とした』とか言っつてほしくないなあ。アプローチしてきたのは向こうの方なんだから。まあボクとしてもどストライクだったから異存はなかったんだけどね」

愛佳「マジかこいつ……」

岡崎「ねえ光流ちゃん」

光流「なに」

岡崎「薬物ね、やめるんじゃないだよ。やめ続けるんだよ一生。そこんところ間違えないように」

光流「——うん、分かってる」

岡崎「自助グループも探したから。これから週に一度は必ずそこに通ってもらう。復帰後もそれは続けてもらう。いいね」

光流「はい」

岡崎「ま、懲役一年、執行猶予三年ってところかなあ。活動再開は判決が出てから半年くらい経ったところでいいんじゃないの。社長にもそう言っておいたから。光流ちゃん、裁判で嘘はいけないよ。どうせばれるんだから。正直に全部話すこと、いいね。あとスッピンとシックな服。これ絶対。心象に関わっちゃうからさ。分かった？」

光流「——うん、分かった」

愛佳「岡崎」

岡崎「なに」

愛佳「あんた最高のマネージャーやわ」

岡崎「気づくのが遅いなあ」

「楽しそうに運転を続ける岡崎。」

○朔野高校・校庭（放課後）【十か月後】  
帰っていく生徒たちや、ランニングをする運動部員たち。

○前同・三年五組教室内  
数学の補習授業を受けている十名の生徒たち。その中の真菜美と紗彩。二人貧乏ゆすりなどしてイライラしている。

数学教師・岸上「こらあ江藤、新野。ちゃんと聞かんかあ。誰のための補習やあ」  
ギリッと岸上を睨む二人。

○前同・下駄箱のところ  
上履きから靴に履き替え、脱兔のごとく駆け出す真菜美と紗彩。

○路上  
息を切らして走っていく真菜美と紗彩。  
真菜美「こんなん、ありえへん！」  
紗彩「岸上のオッサン、間に合わへんかったらシバく！ マジでシバく！」  
地下鉄の階段を駆け下りていく二人。

○地下鉄のプラットフォーム  
発車間際の地下鉄に飛び込む二人。

○地下鉄車内  
席に着く二人。動き出す地下鉄。  
紗彩「ま、ま、間に合うかな……」  
真菜美「ギリ、大丈夫やと思う……」  
二人、荒い息を収まるまでついて。  
紗彩「悪かったね、つきあわせてしてもて」

真菜美「え？」

紗彩「そやからへラ・フェイ」と羽月さ

んって、やっぱ、あれやん」

真菜美「『やっぱ、あれ』のままやったら、

復活ライブへコッタパルル」でせえへん

よ」

紗彩「まあ、そうか。そうやな」

真菜美「それにな、ふふふ」

紗彩「なによ」

真菜美「いや、昨日羽月さんからラインが

あつてな。んふふ。今日なへラ・フェイ」

の復活ライブとちがうねんなあ」

紗彩「はあ？ あんたなに言うてんの？」

真菜美「サブライズ知ってるの、自分だけっ

ていうの、気持ちええなあ」

ニヤニヤ笑う真菜美を怪訝そうに

見て首をひねる紗彩。

○コッタパルル・店内（夜）

フロアが観客でいっぱいになってい

る。朔野高校の制服を着た学生たち

がそこここにいる。人波の中、身を

屈めて前進し、最前列までたどりつ

く二人。

紗彩「ズルやってもうた」

真菜美「今日はかまへん」

紗彩「やんな」

無人のステージを見る二人。

×

×

×

開演。へラ・フェイ」の四人が現れる。

大歓声、大きな拍手。それぞれの位置

につく四人。

光流「——こんばんは。今日このステージに

立てることを、本当に嬉しく思います。も

うみんなを、仲間を裏切ることとは絶対にあ

りません」

深く頭を下げる光流。拍手が沸く。

光流「実は、今日はヘラ・フェイの再始動ライブではありません」

ざわめく客席。

光流「これから年に一回、この最高のライブハウスで、朔野高校の軽音のみんなを招待して演ります。演り続けます」

客席。真菜美を見る紗彩。真菜美、得意げに紗彩を見て。

光流「その日、わたしたちはヘラ・ガロピーヌです」

舞台袖からギターを肩掛けにした羽月が現れる。どよめき。歓声と拍手。舞

台中央に立つ羽月。

羽月「えーっと。嫌やっけ言うたんやけどね。どうしてもってきかへんねん、四人とも。

人の気も知らんで、ほんま」

笑いが起きる。羽月と光流、見つめあう。うつむく光流。

羽月「なあ光流。あんたわたしなんかよりずっと知ってるはずやで。どんなクスリよりステージの快感が最高やっけ」

頷く光流。頷く羽月。

羽月「えーっとね。まずは個人的な報告があります。えー、妊娠してまーす」

拍手、指笛。

羽月「大事にするわ。ここに居てるみんなに誓う。生まれてくる子、大事にする。わたしが、慎太ちゃんと順ちゃんにしてもらったみたい、福丸といっしょにめっちゃめっちゃ大事にするから——よし、ほな、いこか。

えーっとね、中学入ってすぐにアコギ買うてもろうてんよわたし。それからずっとリフ練習してた曲があつて。でも上手いこと



弾けへんくてね。学校でも昼休み必死こいて練習してたんよ。そしたらそれ見てた（美咲をコナして）このピアノ挫折からのギター弾きが一発で弾いてしもてき。で、一緒にやろうって言うたところから全部が始まったんよ。んで、すぐに愛佳と鈴奈誘って。そんでな——今日光流が入った。そやからその曲から始めるわ」

大きな拍手。

羽月「へガロピースもへラ・フェイも演るで！ お腹の子、よう聴いときや！ 『電光石火に銀の靴』！」

美咲の激しいギターリフ。繰り返されるその印象的なメロディーは段々と大きくなっていく。そこに入る愛佳のベースと鈴奈のドラム。アコギをかき鳴らす羽月。スタンドマイクを握る光流。うたいだす。

間奏。美咲のリフ。光流、ブルースハーブを激しく吹きだす。歌いだす羽月。後奏。美咲のリフ。それを支える愛佳の重厚なベースと爆ぜる鈴奈のドラム。

羽月・光流「オイオイオイ！」

観客を煽る羽月と光流。二人のアクションで終曲。爆発する観客。真菜美と紗彩が飛び跳ねている。

羽月「へラ・ガロピースです。よろしく！」  
大歓声の中、羽月を見る光流。光流に歩み寄り肩を抱きしめる羽月。光流、羽月に寄りかかるようにして。光流の髪を優しく撫でる羽月。

○【画面・ブラックアウト】

泉谷（声）「おまえらなんで俺呼ばねえんだ、このやろー！」

羽月（声）「ちよっ……なに勝手に入って来て  
んねん！ てか、なんでおんねん！」

泉谷（声）「うるせえ！ 俺呼ぶだろー普通！」

羽月（声）「呼ぶかあ！」

泉谷（声）「冷たいなあ。ベソベソ泣いてたく  
せしやがつて。誰のおかけだと思っただ。

この腹ボテと元ヤク中が」

羽月（声）「帰れええっ！」

泉谷（声）「悪かったよ。な、羽月。演ろうよ。

一曲だけ。あとは邪魔しない。一曲だけ俺に  
も歌わせろ、な」

羽月（声）「——なに演るのよ」

泉谷（声）「決まってんじゃねえかよ——

『翼なき野郎ども』だ！ おら、いくぞギター！」

羽月（声）「もう！ それ最後に演る予定やった  
のにい！」

#### ○【画面、映し出されて】

〈ラ・ガロピーヌ〉と泉谷しげるの

「翼なき野郎ども」が始まる。

キャスト、スタツフロールが流れてくる。

（了）

本稿に歌詞が登場する歌曲

① 「春夏秋冬」（泉谷しげる）

詞／曲〓泉谷しげる

② 「デトロイトポーカー」（泉谷しげる）

詞／曲〓泉谷しげる

③ 「友よ」（岡林信康）

詞／曲〓岡林信康

④ 「火の鳥」（泉谷しげる）

詞／曲〓泉谷しげる

⑤ 「ラブレター」（ザ・ブルーハーツ）

詞／曲〓真島昌利

- ⑥ 「夕暮れ」(ザ・ブルーハーツ)  
詞／曲 甲本ヒロト
- ⑦ 「花嫁」(はしだのりひことクライマックス)  
詞／北山修 曲／端田宜彦
- ⑧ 「電光石火」(ザ・ブルーハーツ)  
詞／曲 甲本ヒロト
- ⑨ 「君にささげるラブソング」(岡林信康)  
詞／曲 岡林信康
- ⑩ 「二度とない人生だから」(泉谷しげる)  
詞／泉谷しげる 曲／早川隆
- ⑪ 「春のからっ風」(泉谷しげる)  
詞／曲 泉谷しげる
- ⑫ 「街はばれえど」(泉谷しげる)  
詞／曲 泉谷しげる
- ⑬ 「陽が沈むころに」(泉谷しげる)  
詞／曲 泉谷しげる
- ⑭ 「里帰り」(泉谷しげる)  
詞／曲 泉谷しげる
- ⑮ 「眠れない夜」 泉谷しげる  
詞／曲 (泉谷しげる)
- ⑯ 「土曜の夜君と帰る」(泉谷しげる)  
詞／曲 泉谷しげる
- ⑰ 「終わりをつげる」(泉谷しげる)  
詞／曲 泉谷しげる
- ⑱ 「野性のバラッド」(泉谷しげる)  
詞／曲 泉谷しげる
- ⑲ 「電光石火に銀の靴」(泉谷しげる)  
詞／曲 泉谷しげる
- ⑳ 「翼なき野郎ども」(泉谷しげる)  
詞／曲 泉谷しげる